

島嶼地域で暮らす高齢者の“健康”に関する文献的考察

小川 智子・齋藤 茂子

概 要

島嶼地域で暮らす高齢者のこれまでの研究で得られている健康に関する知見を整理し、その特徴について考察した。その結果、島嶼地域で暮らす高齢者の健康に関する知見は、《島民としての信条》、《主観的な健康指標と関連要因》、《望む生活や生きがい》、《高齢者の日常的な営み》、《高齢者を支援する保健医療福祉の課題》の5つのカテゴリに整理された。島嶼地域で暮らす高齢者のヘルスプロモーションを推進するためには、主観的健康指標に基づくQOLの評価だけでなく、島嶼地域の高齢者の特性を踏まえたQOLそのものについて探求する必要がある。

キーワード：島嶼地域, 高齢者, 健康, ヘルスプロモーション

I. はじめに

海洋島嶼国である日本は、大小あわせて6,852もの島々から構成されており、そのうち422島は、人々が暮らす有人島である(財団法人離島センター, 2010)。島嶼地域は、人口減少や過疎化といった共通の課題を有しており、少子高齢化が進む我が国の10年先を行く地域として、保健医療福祉における課題について言及されることが多い。そこに暮らす住民、とりわけ高齢者は、島の歴史や文化を重んじ、自然との共存による豊かな生活を営んできた経緯がある。社会資源が限られる中、老いてもなお島の暮らしを望む高齢者には、健康を「生きる目的」ではなく、「毎日の生活の資源」と捉えるヘルスプロモーションの健康観が備わっているといえる。

健康とは、一般的によく用いる言葉であるが、その定義は、時代変遷とともに変化し、人や立場によって様々な見方がある複雑な概念であるといわれている(小西, 2006)。しかし、日常的に人々が用いる健康の考え方には、「疾患がないこと」、すなわち「疾患の対極としての健

康」が根強く存在する。老化に伴い生理機能が低下する高齢者の健康を推進するためには、病気や障害といった身体的側面を重視するのではなく、基本的な生活機能の遂行や、Well-beingにおける健康の概念を探求することが重要である。豊かな自然や文化の中で育まれた島嶼地域の高齢者の健康について追求することは、島嶼地域だけではなく、将来を見据えた我が国の高齢者施策にも寄与すると考える。

そこで、本研究では、ヘルスプロモーションにおける健康をSmith(1983)の健康の定義を参考に、「健康とは、疾病や障がいの有無に限らず、自己実現を通じて生命や生活の質をもたらし、その人らしく日々の生活を営むことができる状態」と定義し、島嶼地域で暮らす高齢者のこれまでの研究で得られている健康に関する知見を整理して、その特徴を考察することを目的とした。

II. 方 法

1. 対象文献の抽出

文献は、医学中央雑誌のデータベースとCiNii

Articlesのデータベースにより、「島嶼」and「地域」and「高齢者」,「離島」and「地域」and「高齢者」を検索式として検索した。検索期間は、2001年以降とした。高齢者の政策は、介護保険の導入やゴールドプラン21の策定など、2000年に大きく転換が図られたことから、近年の動向を反映するため、2001年以降の文献とした。検索の結果、重複を除き、46件の文献が抽出されたが、島嶼地域に在住する健全な高齢者の生活実態を明らかにする研究であること、研究フィールドを島嶼地域とした目的が明確に記述されている文献であることに限定し、最終的に23件の文献を分析対象とした。

2. 文献の分析方法

対象文献の研究結果から、島嶼地域で暮らす健全高齢者の健康を質的記述的に分析した。高齢者の生活状況が明らかにされている内容を分析シートに抽出し、意味が読み取れる最小単位の文章にしてコード化して、共通の意味内容をもつコードを集約し、サブカテゴリを作成した。更に、サブカテゴリ間の共通性と相違性を比較しながら関連あるサブカテゴリを統合して最終的にカテゴリを作成し、これまでに得られている知見を整理した。分析は、一貫性と確証性を確保するために、研究者間で検討した。

Ⅲ. 結 果

1. 検索文献の概要

検索文献の年代は、2001年から2005年が7件、2006年から2010年が10件、2011年以降が6件であった。研究方法は、量的研究が19件、質的研究と量的研究の両方を合わせたものが3件であった。質的研究は、1件であった。島嶼地域で暮らす高齢者の健康を明らかにする研究には、主観的健康感や、WHOによって開発されたQOLの評価尺度、生きがい感の測定など、高齢者自身が評価する主観的な健康指標を用いた研究が13件存在した。

2. 島嶼地域で暮らす高齢者の健康

島嶼地域で暮らす高齢者の健康を明らかにした研究は、《島民としての信条》、《主観的な

健康指標と関連要因》、《望む生活や生きがい》、《高齢者の日常的な営み》、《高齢者を支援する保健医療福祉の課題》の5つのカテゴリで整理された(表)。以下、カテゴリのサブカテゴリを【 】, コードを「 」で表す。

1) 島民としての信条

「高齢者は島の歴史と伝統を感じながら暮らしている」(鳥谷, 2002) や、「島民相互に助け合う気風を島の良さと認識している」(大月ら, 2009) などの【島民の気風】と、「居住する地区では濃密な人間関係にある」(叶堂, 2003) や「兄弟姉妹や夫婦の絆を感じながら暮らしている」(鳥谷, 2002) などといった、島民は【地縁・血縁との濃密な関係】を形成していることが明らかにされていた。また、「地域住民の郷土への愛着心が極めて強い」(高橋, 2006) ことや「島で暮らす高齢者は島外から嫁いだ者に比べて地域の愛着が強い」(木下ら, 2013) など、強い【地域への愛着心】が明らかにされていた。

2) 主観的な健康指標と関連要因

島嶼地域の「後期高齢者の生きがい感は前期高齢者と比較して低い」(小窪ら, 2014) ことや、「主観的健康感、加齢に伴い身体的要因よりも精神的・社会的要因の影響を強く受ける」(志水ら, 2006) などのように、【年代や世代と主観的指標との関連】が明らかにされていた。また、「同居家族がいる高齢者は主観的健康感が高い」(松浦ら, 2006) や、「独居高齢者はうつ状態の割合が高い」(福澤ら, 2001) など【家族形態と主観的健康指標との関連】も明らかにされていた。また、「病院にかかるような病気を持っている高齢者は主観的健康感が低い」(山下ら, 2007) ことや「今生活に不幸せなことが多い高齢者は、精神的健康度が低い」(志水ら, 2008) などのように【身体的・精神的状態と主観的健康指標との関連】も明確にされていた。そして、「請求書の支払いができる高齢者は精神的健康度が高い」(志水ら, 2008) や、「自身の能力を活用できている高齢者はQOL評価が高い」(濱野ら, 2012) などといった高齢者の【生活への能動性と主観的健康指標との関連】も明らかにされていた。また、「地域活動への参加の機会がある高齢者は主観的健康感が高い」(山下ら, 2007) や、「主観的に健康である高齢者は社会関連性

島嶼地域で暮らす高齢者の“健康”に関する文献的考察

表 島嶼地域で暮らす高齢者の健康に関する知見のカテゴリ化

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
島民としての信条	島民の気風	・高齢者は島の歴史と伝統を感じながら暮らしている (鳥谷, 2002)
		・島民相互に助け合う気風を島の良さとして認識している (大月ら, 2009)
		・高齢者は豊かな自然を感じながら暮らしている (鳥谷, 2002)
		・自分で出来ることは人や行政サービスに頼り過ぎずに自分で行いたいという自立心の強さ (百々瀬, 2002)
	地縁・血縁との濃密な関係	・自らが主体となって積極的に社会に関わる姿勢は低い (志水ら, 2004)
		・居住する地区では濃密な人間関係にある (叶堂, 2003)
		・兄弟姉妹や夫婦の絆を感じながら暮らしている (鳥谷, 2002)
		・居住期間が30年以下の者は、31年以上に比べて一般的信頼感が低い者が多い (木下ら, 2013)
		・地区内で充足できないニーズは「消失」する傾向にある (叶堂, 2003)
		・情緒的サポートは、社会との結びつきがあるが、手段的サポートは家族内から提供されている (志水ら, 2004)
地域への愛着心	・地縁・血縁による社会的ネットワークが形成されているから、外出に対して不便を感じない (鳥谷, 2002)	
	・地域住民の郷土への愛着心が極めて強い。 (高橋, 2006)	
	・島で暮らす高齢者は島外から嫁いた者に比べて地域への愛着が強い (木下ら, 2013)	
	・居住期間が30年以下の者は31年以上に比べて地域への愛着が低い者が多い (木下ら, 2013)	
主観的な健康指標と関連要因	年代や世代と主観的健康指標との関連	・島で暮らす高齢者は、一時期を島外で生活した者に比べて地域への愛着が強い (木下ら, 2013)
		・後期高齢者の生きがい感前期高齢者と比較して低い (小窪ら, 2014)
		・主観的健康感、加齢に伴い身体的要因よりも精神的・社会的要因の影響を強く受ける (志水ら, 2006)
		・後期高齢者の暮らし向きへの評価は前期高齢者より高い (小窪ら, 2014)
	身体的・精神的状態と主観的健康指標との関連	・後期高齢者は、地域社会における人とのつながりが少ない (小窪ら, 2014)
		・前期高齢者にとってかかりつけ医の有無は、医療サービスの利用に影響する (森ら, 2012)
		・日常生活の行動圏は、高齢者層と若年層では差がある (高橋, 2006)
		・女性は年齢とともに地域社会における人とのつながりが少なくなる (小窪ら, 2014)
		・在宅高齢者の活動能力(老研式活動能力指標)は、年代間の違いはみられない (黒後ら, 2012)
		・女性高齢者の運動能力は年齢が高くなるほど低くなる (黒後ら, 2012)
生活への能動性と主観的健康指標との関連	家族形態と主観的健康指標との関連	・同居家族がいる高齢者は主観的健康感が高い (松浦ら, 2006)
		・独居高齢者はうつ状態の割合が高い (福澤ら, 2001)
	主観的健康指標と関連要因	・同居者のいる高齢者の方が日常において健康な生活習慣を実践している (大月ら, 2009)
		・病院にかかるような病気を持っている高齢者は主観的健康感が低い (山下ら, 2007)
		・今の生活に不幸せなことが多い高齢者は、精神的健康度が低い (志水ら, 2008)
		・身体的に健康である高齢者はQOL評価が高い (濱野ら, 2012)
		・高齢者の外出目的は、高齢者の健康状態の影響を受ける (鳥谷, 2002)
		・健康状態が良好な高齢者は、うつ得点が高い (福澤ら, 2001)
		・主観的に健康である高齢者は、生活満足度尺度が高い (志水ら, 2005)
		・主観的に健康である高齢者は、ADLが高い (志水ら, 2005)
・主観的健康感には高齢者の精神的状況のあり方が関連する (志水ら, 2005)		
地域社会とのつながりと主観的健康指標との関連	・現在健康であると思う高齢者は精神的健康度が高い (志水ら, 2008)	
	・主観的QOLの評価が高い高齢者は、うつ状態の者が少ない (福澤ら, 2001)	
	・請求書の支払いができる高齢者は精神的健康度が高い (志水ら, 2008)	
	・自身の能力を活用できている高齢者はQOL評価が高い (濱野ら, 2012)	
	・役割の遂行を実施している高齢者は、主観的健康感が高い (松浦ら, 2006)	
	・職業を有している高齢者の方が主観的健康感が高い (山下ら, 2007)	
	・島嶼地域の高齢者の生きがい感には生活への主体性が影響する (小窪ら, 2014)	
	・規則的な生活を実施している高齢者は主観的健康感が高い (松浦ら, 2006)	
	・島嶼地域の女性高齢者の生きがい感には、生活の安心感が影響する (小窪ら, 2014)	
	・趣味を持っている高齢者は、主観的健康感が高い (山下ら, 2007)	
地域社会とのつながりと主観的健康指標との関連	・島嶼地域の女性高齢者の生きがい感には、暮らし向きが影響する (小窪ら, 2014)	
	・自らの健康に配慮した食事をしている (藤井ら, 2014)	
	・地域活動への参加の機会がある高齢者は主観的健康感が高い (山下ら, 2007)	
	・主観的に健康である高齢者は社会関連性が有意に高い (志水ら, 2005)	
	・主観的健康感には、社会とのかかわりが関連する (志水ら, 2005)	
	・社会的支援の数が多い高齢者は、うつ得点が高い者が多い (福澤ら, 2001)	
	・島嶼地域の高齢者の生きがい感には、社会への関心が影響する (小窪ら, 2014)	
	・インフォーマルなサポートがある高齢者はQOL評価が高い (濱野ら, 2012)	
	・血縁関係を基盤としたネットワークがある高齢者はQOL評価が高い (濱野ら, 2012)	
	・心配事を聞いてくれる人がいる高齢者は、主観的健康感が高い (松浦ら, 2006)	
・島嶼地域の女性高齢者の生きがい感には、身近な社会参加が影響する (小窪ら, 2014)		
・元気づけてくれる人がいる高齢者は、主観的健康感が高い (松浦ら, 2006)		
・元気づけてくれる人がいる高齢者は、精神的健康度が高い (志水ら, 2008)		

表 島嶼地域で暮らす高齢者の健康に関する知見のカテゴリ化（表のつづき）

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
望む生活や生きがい	暮らしへの認識と願望	・高齢者は島の生活を維持したいと感じながら暮らしている (鳥谷, 2002)
		・高齢者は不便な生活を感じながら暮らしている (鳥谷, 2002)
望む生活や生きがい	明確な生きがい	・高齢者は健康障害をもちながらの生活を感じながら暮らしている (鳥谷, 2002)
		・生きがいは従事してきた職業に関連した活動を行うことである (叶堂, 2003)
望む生活や生きがい	明確な生きがい	・生きがいは親しい人との付き合いである (叶堂, 2003)
		・高齢者は日常生活を通して社会との関わりを持っている (志水ら, 2004)
望む生活や生きがい	相互扶助による生活の営み	・生活に必要な行動として自然に買い物コミュニティを形成している (藤井ら, 2014)
		・他者からのサポートは食材の提供である (志水ら, 2003)
望む生活や生きがい	相互扶助による生活の営み	・他者からのサポートは情報交換である (志水ら, 2003)
		・他者からのサポートは、話相手である (志水ら, 2003)
望む生活や生きがい	相互扶助による生活の営み	・近所づきあい同士の相互扶助が非常に盛んである。 (高橋, 2006)
		・サポート相手は、友人・知人や近くの人が多い (志水ら, 2003)
望む生活や生きがい	相互扶助による生活の営み	・住民同士の相互扶助が機能しているから外出に対して不便に感じていない (鳥谷, 2002)
		・高齢者の余暇活動は日常生活と密接に関連する園芸である (志水ら, 2003)
高齢者の日常的な営み	日常生活に密着した外出や余暇	・外出の目的には畑や庭の手入れがある (鳥谷, 2002)
		・高齢者の余暇活動は、日常生活と密接に関連する庭いじりである (志水ら, 2003)
高齢者の日常的な営み	日常生活に密着した外出や余暇	・高齢者の余暇活動は、日常生活と密接に関連する山菜採りである (志水ら, 2003)
		・高齢者は日常的に外出している (鳥谷, 2002)
高齢者の日常的な営み	日常生活に密着した外出や余暇	・外出の目的には、散歩がある (鳥谷, 2002)
		・外出の目的には、ゲートボールがある (鳥谷, 2002)
高齢者の日常的な営み	日常生活に密着した外出や余暇	・外出の目的には、釣りがある (鳥谷, 2002)
		・高齢者は今ある環境の中で食生活を工夫し、活き活きとした生活を送っている (百々瀬, 2002)
高齢者の日常的な営み	環境特性に応じた食生活	・食糧の特性により工夫した調理方法をとっている (藤井ら, 2014)
		・後期高齢者にとって海路による移動は、医療サービスの利用の障害となる (森ら, 2012)
高齢者の日常的な営み	医療サービスの課題	・医療サービスを利用するには地域レベルの社会的な相互扶助が影響する (森ら, 2012)
		・医療サービスは現状の維持を求めている (鈴木, 2003)
高齢者の日常的な営み	福祉サービスに関する認識と期待	・福祉サービスに関する知識が乏しい (大月ら, 2009)
		・介護保険料の高さと実際に利用できるサービスへの不安 (鈴木, 2003)
高齢者の日常的な営み	福祉サービスに関する認識と期待	・福祉サービスは現状の維持を求めている (鈴木, 2003)
		・離島では中山間地域と比較して腹部肥満の高齢者の割合が高い (山下ら, 2008)
高齢者を支援する保健医療福祉の課題	メタボリックシンドローム該当者の多さ	・メタボリック症候群と診断された高齢者は、漁村地域・中山間地域よりも離島が多い (山下ら, 2008)
		・メタボリック症候群と診断された男性高齢者は、漁村地域・中山間地域よりも離島が多い (山下ら, 2008)
高齢者を支援する保健医療福祉の課題	離島における地域差	・主観的健康感は同じ島嶼地域であっても地域差がみられる (山下ら, 2007)
		・介護サービスの利用状況は中核病院がある島とない島とで差がある (鈴木, 2003)
高齢者を支援する保健医療福祉の課題	離島における地域差	・居住地以外の人間関係が希薄化している現状がある (叶堂, 2003)
		・中核病院がない島の高齢者は、中核病院がある島の高齢者と比較して救急時の対応を不安に思っている (鈴木, 2003)
高齢者を支援する保健医療福祉の課題	地域社会とのつながりとフォーマルサービスの活用	・健診への受診には社会との関わりが関連する (宮本ら, 2008)
		・老人クラブ未加入者は福祉サービスの利用が活発でない (檜原ら, 2008)
高齢者を支援する保健医療福祉の課題	地域社会とのつながりとフォーマルサービスの活用	・高齢期の通院の有無は、ソーシャルサポートが関連する (宮本ら, 2008)
		・高齢者の通院の有無は、社会活動への参加状況が関連する (宮本ら, 2008)

が有意に高い」(志水ら, 2005) など【地域社会とのつながりと主観的健康指標との関連】も明確にされていた。

3) 望む生活や生きがい

「高齢者は島の生活を維持したいと感じながら暮らしている」(鳥谷, 2002) 一方で、「高齢者は不便な生活と感じながら暮らしている」(鳥谷, 2002) など【暮らしへの認識と願望】を有していた。また、「生きがいは従事してきた職業に関連した活動を行うことである」(叶堂, 2003) ことや「生きがいは親しい人との付き合いである」(叶堂, 2003) のように【明確な生きがい】に

ついても明らかにされていた。

4) 高齢者の日常的な営み

「高齢者は日常生活を通して社会との関わりを持っている」(志水ら, 2004) ことや、「生活に必要な行動として自然に買い物コミュニティを形成している」(藤井ら, 2014) などといった住民同士の【相互扶助による生活の営み】が存在していた。また、「高齢者の余暇活動は日常生活と密接に関連する園芸である」(志水ら, 2003) や、「外出の目的には畑や庭の手入れがある」(鳥谷, 2002) などのように、高齢者は、【日常生活に密着した外出や余暇】を楽しんでいた。更

に、「高齢者は今ある環境で食生活を工夫し、生き活きとした生活を送っている」(百々瀬, 2002)ことや、「食糧の特性により工夫した調理方法をとっている」(藤井ら, 2014)のように【環境特性に応じた食生活】を送っていた。

5) 高齢者を支援する保健医療福祉の課題

「後期高齢者にとって海路による移動は、医療サービスの利用の障害となる」(森ら, 2012)や、「医療サービスを利用するには地域レベルの社会的な相互扶助が影響する」(森ら, 2012)などのように【医療サービスの課題】と、「福祉サービスに関する知識が乏しい」(大月ら, 2009)や、「介護保険料の高さと実際に利用できるサービスへの不安」(鈴木, 2003)などといった【福祉サービスに関する認識と期待】について明らかにされていた。そして、「離島では中山間地域と比較して腹部肥満高齢者の割合が高い」(山下ら, 2008)という【メタボリックシンドローム該当者の多さ】について明らかにした研究もあった。また、「主観的健康感と同じ離島であっても地域差が見られる」(山下ら, 2007)ことや、「介護サービスの利用状況は中核病院がある島とない島とでは差がある」(鈴木, 2003)といった同じ離島であっても【離島における地域差】が存在することも明らかにされていた。そして、高齢者の「健診への受診には社会との関わりが関連する」(宮本ら, 2008)ことや「老人クラブの未加入者は福祉サービスの利用が活発でない」(檜原ら, 2008)など【地域社会とのつながりとフォーマルサービスの活用】との関係についても明らかにされていた。

IV. 考 察

質的記述的分析によって得られたカテゴリを本研究における健康の定義と照合することにより、島嶼地域で暮らす高齢者のヘルスプロモーションを推進するための今後の研究課題について考察した。

「高齢者は、島での生活を維持したい」や「生きがいは、親しい人との付き合いである」など、島の高齢者の「望む生活や生きがい」は、島の人々とのつながりを大切にしながら、現在の暮らしを維持したいとする願望であり、健康の定

義で表す“自己実現”と捉えることができる。そして、「高齢者は島の歴史と伝統を感じながら暮らしている」などの【島民の気風】や、「居住する地区では濃密な人間関係である」といった【地縁・血縁との濃密な関係】は、現代の薄れ行く伝統や希薄化する地縁とは相反する島民の“その人らしさ”を表していると考えられる。そして、「後期高齢者の生きがい感」は前期高齢者と比較して低い」や、「同居家族がいる高齢者は主観的健康感が高い」など、高齢者自身の評価による生きがい感や健康感を明らかにしている「主観的健康指標と関連要因」は、島嶼地域で暮らす高齢者の“生活の質”を明らかにしていると考えられる。主観的健康感、健康の質的な側面を評価できる指標である(星, 2005)ことや、QOLの概念には、本人が評価する主観的健康状態が重要な要素として位置づけられている(土井, 2004)ことから、主観的評価は、高齢者のQOLを明らかにしているといえる。更に、「主観的健康指標と関連要因」の【年代】、【家族形態】、高齢者の【身体的・精神的状態】、【生活への能動性】、【地域社会との関わり】の5つサブカテゴリは、高齢者のQOLの向上に関連する要因として明らかにされているといえる。島嶼地域で暮らす高齢者のQOLを高めるためには、これら5つの要因に留意することが有効である。しかし、対象文献において明らかにされている高齢者のQOLは、「主観的健康感」や「生きがい感」といった既存の尺度のみを用いて明らかにした研究が多い。健康を評価する尺度の多くは、高齢者に限定することなく、様々な対象者にも広く用いることが可能である。高齢者という生涯発達観の観点や、【島民の気風】、【地縁・血縁との濃密な関係】、【地域への愛着心】といった「島民としての信条」の特性を踏まえたQOLについて追求する研究はなされていないといえる。高齢者にとってのQOLは、これまでの人生そのものであり、その評価は、若年者とは比較にならない重みを持っているといわれている(古屋, 2004)。島での暮らしの中で培った「島民としての信条」をもつ高齢者のこれまでの人生の深みも踏まえたQOLは、既存の尺度のみでは、明らかにできないと考える。今後は、高齢者のQOLそのものについて追求する

研究が必要である。

島嶼地域は、人口減少や過疎化の背景から、保健医療福祉における社会資源の制約について都市部と比較して論われることが多い。しかし、島で暮らす生活者にとっては、社会資源が少ないことが問題なのではなく、社会資源が少ないことによって、生活者のQOLの向上が図れなくなることが課題であると考えられる。ヘルスプロモーションの最終目標は、人々のQOLを高めることである(島内, 2010)。島嶼地域で暮らす高齢者のヘルスプロモーションを推進するための施策を講じるためには、高齢者の地域特性を踏まえたQOLを探求する必要がある。

V. 結 論

島嶼地域で暮らす高齢者の健康に関する知見は、《島民としての信条》、《主観的な健康指標と関連要因》、《望む生活や生きがい》、《高齢者の日常的な営み》、《高齢者を支援する保健医療福祉の課題》の5つのカテゴリに整理された。島嶼地域で暮らす高齢者のヘルスプロモーションを推進するためには、高齢者の島民としての信条を踏まえたQOLの本質について追求する必要がある。

文 献

- 土井由利子(2004): 総論-QOLの概念とQOL研究の重要性, 保健医療科学, 53(4), 176-180.
- 藤井若菜, 三木真彩菜, 葛原直美, 他(2014): 島嶼部における高齢者の食生活の検討 食糧の入手方法に着目して, インターナショナルNursing Care Research, 13(4), 85-93.
- 福澤陽一郎, 石橋照子, 吾郷ゆかり, 他(2001): 漁村部の高齢者のうつ状態の背景要因と対策上の課題, 島根県立看護短期大学紀要, 6, 149-154.
- 古屋健・三谷嘉明(2004): 高齢者QOL研究の諸課題, 名古屋女子大紀要, 54, 121-132.
- 濱野香苗, 堀内啓子(2012): 離島在住高齢者のQOLへのインフォーマルサポート等の関連, 日本看護研究学会雑誌, 35(5), 45-55.
- 檜原登志子, 福田育代, 蒔田佳江(2008): 島嶼部高齢者の健康と社会参加の関連性 QOLの分析指標を用いたA町老人クラブ加入者と未加入者の日常生活比較, Quality of Life Journal, 9(1), 66-79.
- 星旦二(2005): 高齢者の健康づくりにおける主観的健康感のすすめ, 生きがい研究, 12, 46-72.
- 叶堂隆三(2003): 「老人の島」の住民と生活 五島列島枕島(長崎県福江市)の高齢者の生活とニーズ, 福岡国際大学紀要, 10, 5-21.
- 木下香織・古城幸子(2013): 島嶼部に生活する高齢者のソーシャル・キャピタルと居住期間との関係, インターナショナルNursing Care Research, 12(2), 65-73.
- 小窪輝吉, 若崎房子, 田中安平, 他(2014): 島嶼高齢者の生きがい感に及ぼす社会関連性の影響, 社会福祉学, 55(1), 13-22.
- 小西恵美子(2006): 成人看護学 ヘルスプロモーション, 34-38, ヌーヴェルヒロカワ, 東京.
- 黒後裕彦, 小林武, 三木千栄, 他(2012): 宮城県内の離島における在宅高齢者の運動能力と活動能力の実態, 理学療法科学, 27(6), 645-649.
- 松浦智和, 西基, 三宅浩次(2006): 島嶼地域高齢者の主観的健康感とその関連要因 ソーシャル・サポート・ネットワークと社会関連性を中心に, 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 2(1), 45-53.
- 宮本雅央, 志水幸, 早川明, 他(2007): 島嶼地域住民の健診受診及び通院行動とライフスタイルとの関連, 北海道公衆衛生学雑誌, 21, 98-108.
- 百々瀬いづみ(2002): 離島社会における保健医療の総合的研究(2) 西阿室村落における食生活の視点を中心として, 天使大学紀要, 2, 173-183.
- 森隆子, 浅尾晋也, 兒玉慎平, 他(2012): 小規模島嶼における医療サービス利用行動の規定要因の検討, 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 22(1), 13-21.

- 大月和彦, 志水幸, 山下匡将, 他 (2009): 粟島における地域福祉推進に向けた基礎的研究, 文教大学教育学部「教育学部紀要」, 43, 31-38.
- Smith, J.A. (1983): THE IDEA OF HEALTH IMPLICATIONS FOR THE NURSING PROFESSIONAL / 都留春夫, 他 (1997): 看護における健康の概念, 107-125, 医学書院, 東京.
- 志水幸, 亀山育海 (2003): 離島高齢者の顔語予防に関する研究 離島高齢者の余暇活動および他者との相互サポートを中心に, 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 10, 87-97.
- 志水幸, 早川明, 鳥谷綾郁, 他 (2008): 粟島地域住民の精神的健康の関連要因に関する研究, 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 15, 21-29.
- 志水幸, 小関久恵, 嘉村藍, 他 (2005): 島嶼地域高齢者の主観的健康感の規定要因に関する研究, 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 12, 31-36.
- 志水幸, 小関久恵, 嘉村藍 (2006): 島嶼地域住民の主観的健康感の関連要因に関する研究, 厚生学, 53 (13), 14-19.
- 志水幸, 小関久恵, 亀山育海 (2004): 離島高齢者の社会とのかかわりの状況に関する研究 山形県酒田市飛島における実態調査結果を中心に, 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 11, 73-78.
- 鈴木静 (2003): 島嶼部における高齢者の暮らしと地域の変容 愛媛県温泉郡中島町を例に, 医療・福祉研究, 14, 45-53.
- 高橋信幸, 浜崎裕子, 花城暢一, 他 (2006): 離島・過疎地域におけるケアリング・コミュニティ形成に関する研究(その1) 長崎県西海市崎戸地区におけるインフォーマルサポートの活用化にむけて, 長崎国際大学論叢, 6, 143-152.
- 藤内修二 (2010): 健康なくに 地域で支える一人ひとりの健康 公衆衛生のチカラ 知識伝達から関係性の構築へ, 15-25, 医療文化社, 東京.
- 鳥谷めぐみ (2002): 離島社会における保健医療の総合的研究 (3), 天使大学紀要, 2, 185-194.
- 山下一也, 井山ゆり, 松本玄智江, 他 (2008): 地域在住高齢者のメタボリック症候群の実態 島根県の3地域における検討, 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 2, 1-6
- 山下匡将, 宮本雅央, 村山くみ, 他 (2007): 主観的健康感と社会とのかかわりに関する研究, 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 3 (1), 29-34.
- 財団法人離島センター (2010): 日本の島々が果たす役割, 2015-9-1, http://www.nijinet.or.jp/Portals/0/pdf/publishing/Remote_Islands_JP.pdf

小川智子・齋藤茂子

A Review of Studies on “Health” of the Elderly Living in islands.

Tomoko OGAWA and Shigeko SAITO

Key Words and Phrases : Islands, Elderly, Health, Health Promotion